

第47話 スタジオ夜話(番外編)

サウンドドラマの制作

(音の入り口・音源 10) 台詞の収録Ⅲ

☆はじめに

スタジオ夜話番外編、サウンドドラマ制作(音源 10) 台詞の収録その3回目です。前回のお話をさらに具体的に補足した、より具体的なお話しです。一步踏み込んだり、より具体的と今まで何度も言ってきましたが、今回は本当に具体的です。(今までも具体的なことは言ってきたつもりですが・・・)

また録音、収録の常識?とは

ということも併せて考えてみたいと思います。諸先輩の見識あるご意見なども一応参考にしていますが、紛らわしく誤解など起きる点もあるかとは思いますが、お付き合いのほどよろしく願っています。

☆サウンドドラマの楽しみ方

放送メディアには期待しない?

以前スタジオ夜話でもお話ししたのですが、今や音声コンテンツは放送に限らず様々な媒体で提供され、またそのフォーマットも多様です。もはや守られるべき基本スタイルは無くなったのでは?前号のデジタルエッセイ(坂口裕靖氏著)「最後の砦」ではフレームレートを例にして映像フォーマットという概念自体が次世代ではどうなるのだろうと語っていました。筆者も音声の世界でも同様のことが起こっていると思っています。(遅れましたが毎回坂口氏の達筆な文書に筆者は感銘。その内容には共感して

います。例として今回引用させていただいたことをここにお詫び申し上げお許しをお願いいたします。)

さて映像同様音声の世界でもその記録、伝送フォーマットは多様化しています。ラジオドラマとして発展してきたサウンドドラマはもはやラジオという媒体だけを意識しては、その未来はありません。大切なのは音で作品を創り、多くの人にその作品を楽しんでもらうことです。

前回モノラルとステレオあるいは多チャンネル、その収録にあたってはステレオを基本とお話しをしました。しかしそのコンパチビリティに関しては明言を避けました。収録技法はともかくこの多様化した提供媒体フォーマットのなかで、出来上がり作品の提供媒体フォーマット上のコンパチビリティまで考慮する必要があるのか、疑問に感じているからです。サウンドドラマはラジオという媒体では楽しめないと言っているわけではありません。ラジオにはラジオの、CDにはCDの、ネットダウンロードには・・・とその楽しみ方も様々であると思います。創り手はその提供媒体を意識して今後の作品創りをしてほしいと思い、リスナーはその作品の提供媒体の特性を理解して、より良い聴取環境で楽しんでもらえたらと考えています。

サウンドドラマ制作者に限らず音声に携わる者は様々なフォーマットの特質をとらえ、秀逸な作品を創ることで制作環境やそれを楽しむ聴取環境も発展してゆくと筆者は考えています。

☆台詞収録とマイクロフォンセッティングとマイクロフォンワーク

前回も同じ小見出しタイトルの項目がありました。より具体的にお話しをすすめます。

1) 複数マイクロフォンのセッティング

音のカブリの問題を考える音楽録音ではマルチマイク収録の時、そのマイクロフォンが本来収録すべき目的の楽器以外の音をとらえることを極力避けてきました。

何故でしょう。目的以外の楽器音が微妙な時間差を持ってそのマイクロフォンで収録されてしまう。数多くあるマイクロフォンの相乗効果が位相ずれなどを起こし、音に濁りなどが起こるといったことを避けるためのテクニックです。基本は収録された各楽器の音を再MIXして完成させることにあります。

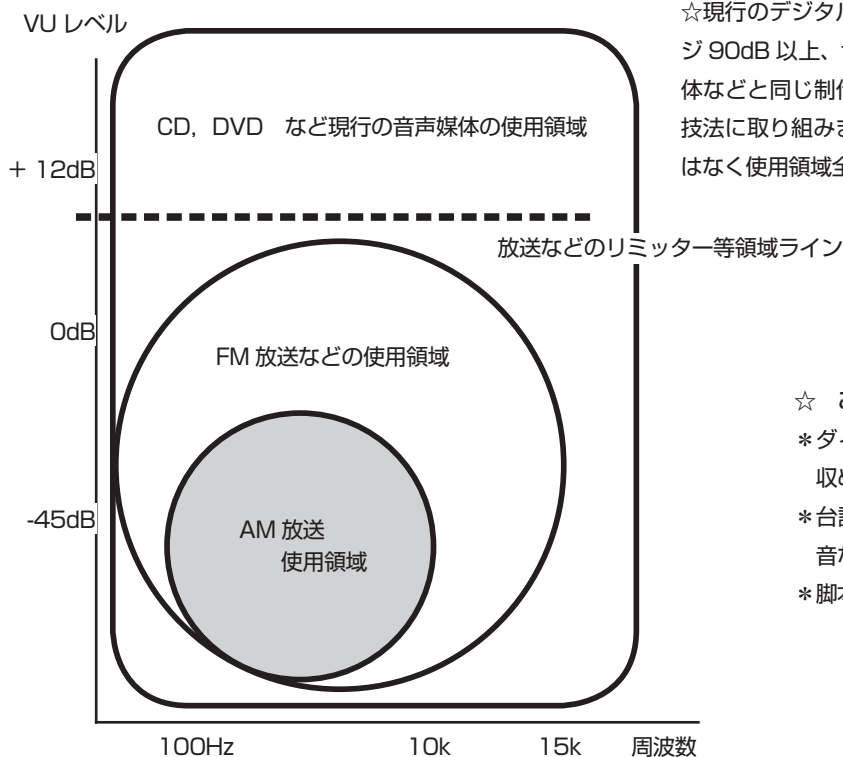
各楽器のニュアンスや明瞭度、ピアノコンチェルトではオーケストラの中のピアノではなく、オーケストラと再生音場では対等の音でリスナーに伝わってきます。

こうしたことは悪い訳ではありません。むしろライブ会場とは違った新たな音の楽しみ方です。近年様々な録音優秀音源として各賞を受ける推薦CDなどもほとんどがこうしたCD作品です。

筆者もJAZZが好きでよく聴くのですが、50年60年代の極端なMIXのブルーノートなど大好きです。しかしそれ以前のワンポイント収録の作品にも魅力を感じま

スタジオ夜話

サウンドドラマ制作で使うレベルや周波数領域



☆現行のデジタル媒体の音声使用領域はダイナミックレンジ 90dB 以上、f 特 20kHz 以上となっています。放送媒体などと同じ制作技法ではすでに限界と・・・新たな制作技法に取り組みましょう。領域のピークのみ使用するのではなく使用領域全体を意識しましょう。

- ☆ これまでのラジオドラマなどでは・・・
- * ダイナミックレンジを全体で 55dB 以内に収めることが巧の技となります。
- * 台詞の大小と大音量の効果音、小音量の虫の音などとの関係は？
- * 脚本や演出的設定に多くを委ねる創りになる

す。確かにソロパートなどは音として前にでてくる？のではなく演奏が前に出てこようとしているあたりに聴きこたえがあります。

音のカブリの問題はこうしたことを踏まえマルチマイクロフォンセッティングに様々な影響を与えてきたのです。

しかしこれこそがサウンドドラマでのマイクロフォンセッティングに問題を投げかけている要素です。

現在サウンドドラマの台詞収録にあたってはそれなりの出演者数がある場合、極力カブリを避けるマイクロフォンセッティングの傾向にあります。そのため必要ならば一人 1 本のセッティングです。

お互いの台詞がカブリなければ不必要なマイクロフォンチャンネルはミュートすらします。どうもその手間が良い仕事？らしいです。

後でお話ししますがレベルセッティングでも筆者とは違う発想をしています。(筆者が正しい訳ではありません。)

前回台詞収録ではその背景となる背景音との空間的關係性が重要とお話ししました。これは背景音との関係性のみならず、台詞どうしの空間的關係性も重要であるということです。出演者どうしの空間的位置関係は？ その要素は演出や脚本上の指定のみならず、現実の聞こえてくる音の空間性を担保しなくてはならないということです。

前回のお話しのなかでスタジオ内に一見無意味にも思えるマイクロフォンセッティングがあったり、出演者がとんでもない方向に声を出していたこと、この時各マイクロフォンは若干の調整などあるものの、基本的にはすべて生きています。むしろ音のカブリたっぷりです。このカブリが関係性にとって重要な要素となるのです。

スタジオ内の基準点と各マイクロフォンとの関係、出演者などの都合上どうしてもオンリー録りをする場合でも、すべてのマイクロフォンをセッティングします。

筆者流の「良い仕事」です。この手間は、はたして無意味でしょうか。これが実に台詞どうしの空間性を担保しているのです。お疑いなら是非一度収録して聴き比べてみてください。

2) マイクロフォンの収録レベル「ダイナミックレンジとの関係」

以前スタジオ夜話でもお話ししましたが、FM 放送でステレオドラマが放送され始めた当初、アナウンサーが本編冒頭で聴取者により良い聴取環境をという思いから「私の声が正面真ん中からちょうどよく聴こえるように受信機などを・・・」と案内していました。とても素晴らしいことだと筆者

は思います。TVでも以前はテストパターンやカラーバーなど時々目にしていたのですが最近ではほとんど目にしません。

使用している機器の性能など今や気にせずとも、きっと正しく再現されているでしょう。音声の扱いも最近ではVU計やピーク計と併せてラウドネス計などの導入により聞きやすい音声の提供を心掛けているようです。スタジオ夜話サウンドドラマ制作で問題とするのは実はもっと素朴な問題なのです。

しかしこの問題はすこぶる重要です。以前筆者が仕事で制作したサウンドドラマを民放ラジオ局で放送する際、そのドラマのダイナミックレンジが問題となり、ラジオ放送用に作り直した経験があります。そうした事例を参考にお話ししたいと思います。

「低い録音レベル領域を意識する」

作品提供媒体の違いが作品制作に大きな影響をあたえることは、すでにご存じのことと思います。冒頭のアナウンサーが良い役割であることを前提にご理解いただければ幸いです。

さて冒頭のアナウンサーの声がちょうど良く聴こえるアナウンサーの録音レベルとは？ また出来上がりサウンドドラマのトータルレベルの中で、アナウンサーの出来上がりレベルは？

放送という媒体では送信機などの問題からリミッターやコンプレッサーなどの使用が考えられます。プログラム全体のなかでの最大のピークをコンプレッサーなどがかからないギリギリに設定した場合、プログラム最小レベルの素材は？ ここがたぶんエンジニアの腕の見せ所なのでしょう。その通りです。限られたレンジのなかで最大の効果を生み出すミキシングテクニックです。

しかし作品提供媒体がCD、ハイレゾ、5.1CHだと、こうした職人技はどういう役割で生かされるのでしょうか。

ここで冒頭のアナウンサーが登場します。あくまでも仮にですがアナウンサーが聴取者の前2mの距離で普通の会話レベルの音量で聴こえることが前提ならば。放送媒体の場合スタジオ調整卓の出力でプログラムピークをピーク計（瞬時）でプラス12dB～16dBにとると（作品内容にもよる）アナウンサーはマイナス10dBから15dB、最小音の素材はマイナス50dBぐらいが、まあまあかという感じです。せいぜいダイナミックレンジが取れたとしても65dBかな・・となります。

併せて周波数特性的にも12KHz。FMではなくPCM放送はどうしているか？

しかし放送でも聴取者がこのアナウンサーレベルをちょうどよく設定して聴いてくだされば、かなり広いレンジ感で作品を楽しめます。このアナウンサーの出来上がりレベルは現在のアナウンサーレベルに対してはかなり低めです。

サウンドドラマ制作では台詞は小さな声から大きな声を扱う機会が多く、以外にそのレンジ幅を広くとることが必要となるのです。ドラマ上特に大きな素材音が台詞とどっこの大きさでしか表現できないのではお話しになりません。

また筆者の経験からレベルの低い音に対して聴取者は寛大で聴こうと意識してくれます。正に音に対する人間の聴覚心理が作用してくれるのです。周りの音を小さくしたり、大きくしたりしなくとも自然に感じてくれるのです。

一方大きな声をかき消す効果音なども台詞収録レベル全体を低めに設定することにより十分に期待できます。放送という媒体でもアナウンサーを以前のようにお願いすることによってかなりダイナミックレンジ

を広く有効に使えるわけです。（放送の場合は他のプログラムとの関係があるので実際には無理がある。）

これがCDやハイレゾ音源、DVDやブルーレイなど考えればその可能性は絶大なものとなります。ダイナミックレンジが90dB以上は当たり前、録音再生機器のSN比も飛躍的に向上した現在、台詞や効果音素材、音楽などサウンドドラマ制作での収録レベルなど今一度考えてみる必要があります。

特に台詞の収録ではカブリの音、起こってしまうアクションノイズなども重要な音素材です。台詞用マイクロフォンでのカブリのないピーク録音は、はたして……。もちろん素材収録や劇伴収録でも同様です。

筆者の提言、収録機器は今日素晴らしい性能を私たちに提供してくれています。そこで「録音では下をもっと上手く使おう！」（下＝低い録音レベル領域のこと）アシスタントスタッフは上手く使うのではなく、丁寧をお願いすることであることは言うまでもありません。（ご確認を！）

☆次回は

スタジオ夜話（番外編）サウンドドラマの制作（音の入り口）まさに入り口マイクロフォンのお話です。

マイクロフォンの選択や組み合わせやスタジオなどでのセッティングについてお話しします。まだまだ寒い日が続きます。読者皆さま、諸先輩におかれましてはお身体にお気をつけください。

— 森田 雅行 —